

## 参考文献

### 『大西民子全歌集』

大西民子/著 沖積舎 1981年

### 『自選100歌選 大西民子集』

大西民子/著 牧羊社 1986年

### 『まぼろしは見えなかった』

さいたま市立大宮図書館/編 さいたま市教育委員会  
2007年

### 『大西民子講演録 現代の短歌について』

大西民子/著 岩手復興書店 2016年

### 『青みさす雪のあけぼの—大西民子の歌と人生—』

原山喜亥/編 さきたま出版社 1995年

### 『無告のうた 歌人・大西民子の生涯』

川村杏平/著 角川学芸出版 2009年

### 『大西民子 歳月の贈り物』

田中あさひ/著 短歌研究会 2015年

### \*「おおみやデジタル文学館—歌人・大西民子—」

大西民子さんの詳しい情報をご覧ください

<https://trc-adeac.trc.co.jp/WJ11C0/WJJS02U/1110015100>

2019.5.7 発行

さいたま市立大宮図書館

さいたま市大宮区吉敷町 1-124-1

電話 048-643-3701

## 大宮ゆかりの歌人 大西民子の生い立ち

### 展示資料目録

1	原稿「はまなすの 花も吹かる 潮風に ゆれやすかるは ころなりけり」
2	奈良女子高等師範学校時代のノート
3	「卒業記念 奈良女子高師報国会」バッジ
4	原稿「夜更かして 語り尽きずシャーロック・ホームズと 謳はれつつ貧しかりし 父の思い出」
5	木俣修の歌集『冬歴』
6	原稿「帰らざる 幾月ドアの 合鍵の 一つを今も君は 持ちみるらむか」
7	短冊「鎮まらぬ ころのごとく 夜もすがら 風を集めて 鳴る梢なり」
8	色紙「葱の花 しろじろと 風に 揺れあへり 戻るほかなき 道となりつつ」
9	原稿「われの死を 見ずにすみたる 妹とくり返し思ひ ながさまおとす」
10	短冊「遠き雲の 地図を探さむ この町を のがれむといふ 妹のため」
11	色紙「かたわらにおく 幻の 椅子一つ あくがれて待つ 夜もなし今は」
12	『民子』印
13	色紙「完きは 一つとてなき 阿羅漢の わらわらと 起ち あがる夜無きや」
14	短冊「前髪に 雪のしづくを 光らせて 訪はむ未知の 女のごとく」
15	短冊「青みさす 雪のあけぼの きぬぎぬの あはれといふも 知らで終らむ」
16	民子の第一歌集『まぼろしの椅子』

## 大宮での生活

大西民子にとって大宮とは、生涯の中でも多くの時を過ごした場所です。1949(昭和 24)年に夫と共に岩手県から大宮へ移住した民子は、埼玉県立文化会館、旧・埼玉県立浦和図書館・久喜図書館に勤務する傍ら、この地で歌人としての頭角を現しました。また、埼玉歌人会の事務局を担当するなど、積極的に活動の場を広げていました。

民子は「埼玉は、盛岡や学生時代を過ごした奈良に次ぐ私の第三のふるさとであり、恐らくここに骨をうずめることになるだろう」と語っています。

多くの作品を発表し短歌の世界で実力を発揮する一方、生活面では家族との死別や夫との離婚に見舞われ、民子は天涯孤独の身となります。しかし、そうした中でも作品を発表し、後輩の指導育成にも尽力するなど、短歌への活動は緩むことはありませんでした。

1994(平成 6)年、民子は心不全により大宮の自宅にて亡くなりました。享年 69 歳。その後、1996(平成 8)年に原稿や資料など約 1 万点が旧大宮市に寄贈され、2000(平成 12)年には、民子を顕彰するため現代短歌新人賞が創設されました。

寄贈された民子の資料は合併後さいたま市が所有しており、整理と管理は大宮図書館が行っています。

## 歌人としての活動

大西民子が大宮へ移住した頃、歌人・木俣修<sup>きまたおさむ</sup>の門をたたき、入門を果たします。師のもとで歌を学び、1953(昭和 28)年には、短歌雑誌『形成』の創刊にも参加しました。一方、私生活では夫との別居状態がはじまり、その複雑な心情は民子の作品にも表現されています。

1956(昭和 31)年、民子は初めての歌集『まぼろしの椅子』を刊行しました。この歌集では、自身の体験による苦悩や不安、悲嘆といった人間の繊細な感情が克明に表されており、多くの共感を呼んだといわれています。また、この歌集により民子の歌人としての名が知れ渡るようになりました。その後も精力的に発表を続け、『不文の掟』『無数の耳』などいくつもの歌集を刊行。その間幾度も経験した家族との離別による孤独感や死生観は、民子の作風に大きな影響を及ぼしました。

長年の業績が認められ、1992(平成 4)年に紫綬褒章<sup>しじゆほうしょう</sup>を受章。民子の短歌の世界での地位は確固たるものになりました。

1993(平成 5)年、長年所属していた「形成」が解散。戸惑う後輩たちのために、民子は持田勝穂<sup>もちだかつほ</sup>とともに、新結社「波濤」<sup>はとう</sup>を創設。雑誌『波濤』創刊号を発行しましたが、翌年に亡くなりました。



©仲佳